

## 編集後記

開学当初より、毎年、事業報告として、スポーツ開発・支援センター一年報を作成してまいりました。2004年度から2012年度までは製本しておりましたが、より多くの方々に、当センターの活動を知っていただきたく、10巻目を迎える今年度より、本学リポジトリを活用したネット上でのデータ配信と転換させていただきました。

さて、2013年度の内閣府の調査によると、日本は高齢化率（65歳以上の人口が総人口に占める割合）が25.1%となり、4人に1人が高齢者という社会になってきたそうです。同時に、超高齢社会の進行と反して、年少人口・出生数は減少している現状があります。

少子・超高齢社会になるにつれて、世間では様々な議論がなされています。主に、社会福祉保障のための増税、地域社会の弱体化（若い者が地域から街へ）、労働力人口の減少などが挙げられます。私自身は、何より個人に、また社会に「動き」というものが少なくなることをご心配しております。個人の日常生活の中で年齢を重ねるうちに、いつしか身のこなしが不自由になり、また、それにより活動範囲が狭まり、「動き」が少なくなっていくと社会全体も同様に、人・空気・コミュニケーションなど、様々な点で「動き」が少なくなっていくと考えております。

当センターは、自主事業・共同事業・受託事業・地域事業（巻頭言参照）を通して、人々の意識の中に、また日常生活に「動き」を与えるきっかけ作りを行うことが務めであります。スポーツは、健康づくり、仲間づくり、コミュニケーションツール、自己表現など様々な形に変えて、私たちに「動き」を与え、活性化につながっていきます。地域も、それぞれ人間の体も、スポーツによって新陳代謝が起き、活性化すれば、街も人も健康になっていくでしょう。

スポーツを通して地域を巻き込み、スポーツ文化を定着させ、ムーブメントを起こし、さらには日本社会全体を健康にしていきたいと考えております。

現代社会の問題に「スポーツ」は「動き」を与え、解決の糸口になるのではないのでしょうか。日本で唯一のスポーツの名のつく大学として、当センターができることを今後も発信していきたいと思っております。

びわこ成蹊スポーツ大学 スポーツ開発・支援センター  
(文責 板金 立樹)